



藝大の教員たちが、
日々の研究やレッスンに勤しむ
「研究室」のなかには
どうなっているのだろうか？
なかなか見る機会のない
部屋を潜入ルポする。

美術学部工芸科 陶芸研究室 島田文雄教授

Department of Crafts, Ceramics
Professor SHIMADA, Fumio

研究室探訪

第二回

Visiting the Laboratory

「轆轤場」と呼ばれる木製の小さな作業場に坐って、学部三年生から院生までが、自分たちの作品制作に取り組んでいる。陶芸研究室では、窯を全員で共有し利用する点特徴的だ。轆轤場では、下級生が隣の上級生からアドバイスを受ける姿を見かける。月に一度の釉薬づくりも全員でおこなう。大勢で作業をすることが多いため、学生たちは「家族的な雰囲気」で、先生との距離も近い」と口々に言う。こういう陶芸研究室ならではの人間関係を「同じカマの飯を食う」と言うのだそう。

島田文雄教授をはじめ他の教員も、「実技の世界は口で教えても意味がない」と、実際に土をこね、絵付けをして手本をみせる。教員の多くも第一線で活躍する作家なのだ。

工芸科には学部二年次の前期に、「実材実習」通称「どさ回り」という授業があり、学生は科が設ける六つの専攻（彫金・鍛金・鍍金・漆芸・陶芸・染織）から三つを選び、実際に素材に触れ制作することで三年次からの進路を決める（学部二年次後期は専攻基礎課程）。陶芸専攻を選んだ理由を学生に尋ねると「土という素材は、自分の手でゼロからつくることができるから」という答えが多く聞かれた。

島田教授は、もともと北欧家具のデザインに興味があり本学に入学したが、実習をとおして陶芸の道に進むこととなったそう。土だけを渡され五日間で好きなものをつくる課題で、当時の田村耕一教授から「無心になれるだろう」と陶芸の魅力を教えられた。土をこね轆轤を回していると、我を忘れるほどに没頭し、



無我の境地を味わうことができたことが陶芸を選んだ理由という。

陶芸研究室が工芸科の他の研究室と異なる最大の特徴は、成型し絵付け、釉掛けをしたあと、最後に窯に入れて「焼く」という行程があることだ。作品を窯に入れた後は全てを火に委ねる。作品のできあがり完璧には予想できない「偶然性」が、陶芸の怖さであり、大きな魅力なのだ。

陶芸研究室の学生は大学院へ進むと、修士一年次に取手校地で自分たちで窯を設計し、レンガを積み、窯をつくる授業「築炉制作実習」がある。これはまさに陶芸の原点を知るよい機会だ。陶芸はそもそも「野焼き」から始まり、中世には穴を掘って窯

で焼くようになった（穴窯）。その後、現在見られる「登り窯」が定着する。つまり、自分で窯を制作することで、先人たちの苦労を知り、火の造形の根本にあるものを体で覚えるのである。

陶芸研究室では国際交流がさかんて、現在八人の留学生が在籍している。今年九月には、本学美術学部の主催で「国際陶芸シンポジウム 2017 in Japan」が開催される予定である。世界九か国約三十三大学が参加予定で、本学大学美術館陳列館では「国際陶芸展」、陶芸研究室では「教員デモンストレーション」、「国際学生陶芸ワークショップ」という催しがおこなわれるそう。



「轆轤場」を隣り合う上級生と下級生、また教員と学生が「同じカマの飯を食う」関係を築く親密な空間。